

Ⅱ 栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容

石川 日出志

長野県北部（北信）の中野市柳沢遺跡で銅鐸 5 点・銅戈 8 点が、西日本と共通する青銅器の埋納状態で確認されたことは、北信地域だけでなく東日本の弥生文化に対するこれまでの理解に見直しを迫るものである。柳沢遺跡の青銅器群は、その型式的特徴から弥生時代中期中頃から後半期にかけて製作されたものと判断でき、それは北信では栗林式土器段階に相当する。そこで本稿では、今後こうした見直し作業を進める礎として、〔課題①〕これら青銅器が北信にもたらされ、用いられ、埋納された時期に当たる栗林式土器の広域編年上の位置、〔課題②〕それと青銅器の型式との整合性、〔課題③〕近畿以西から青銅器および青銅器祭祀を受容し得る背景、〔課題④〕青銅器文化の受容の地域性、の 4 点を確認しよう。

1 栗林式土器の細別と広域編年

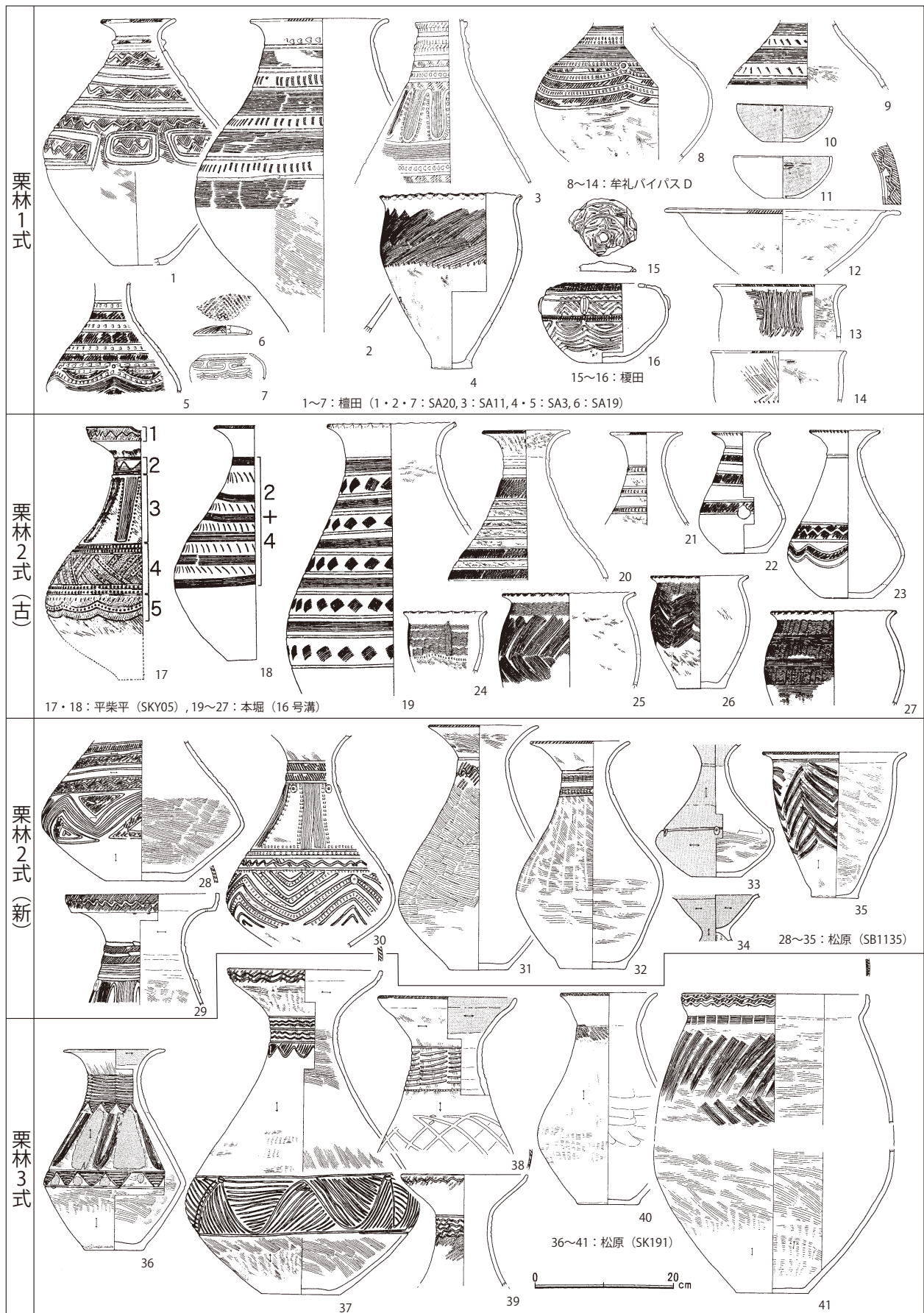
（1）栗林式土器の編年細別

栗林式土器は戦前に設定されたが、ようやく 1960～70 年代になって桐原健・笹澤浩両氏により議論が本格化した。特に笹澤氏は長野市平柴平遺跡の一括資料をもとに栗林Ⅰ式とⅡ式を設定し、それに百瀬式併行土器が後続するとした。そして 1980～90 年代になると本格的な調査が相次ぎ、詳細な検討が重ねられた。特に寺島孝典氏は、長野市松原遺跡の竪穴住居跡から出土した良好な一括資料に基づいて 3 段階のまとまりを認め、さらに浅川扇状地遺跡群牟礼バイパス D 地点出土の一群を松原遺跡に先行する一群と認め、栗林式を古段階／中段階（松原Ⅰ期）／新段階古（松原Ⅱ期）／新段階新（松原Ⅲ期）の 4 段階に細分した（寺島 1993：注 1）。この寺島編年は、従来からの議論の蓄積に立脚したものであり、区分や命名に差異はあるものの、変遷観は研究者間でほぼ共有されている。

石川（2002）は、縄文土器における文様帯の考え方を栗林式土器に応用する上田典男氏や賛田明氏の考え方に導かれながら、栗林式土器の壺の「装飾帯」を整理し、その変遷過程を追跡することによって、寺島編年の段階区分をより明確にした。その装飾帯名称は、第 1 図 17・18 に添えた数字のとおりで、口縁部が 1、頸部の帯が 2、胴部の帯が 4、頸部 2 と胴部 4 の間の単位文帯を 3、胴部 4 の下に付加される単位文を 5 装飾帯と呼ぶ。1 装飾帯は他から独立しているので装飾帯構成の上では明記せず、土器 17 の場合は「2・3・4・5」と表記する。3～5 の装飾帯が欠落して無文となる場合は 0 と表記する。また、18 のように頸部から胴部まで同種の帯が重畳する場合は 2+4 と表記する。本稿では、馬場伸一郎氏による修正意見（馬場 2008b）も参照して 2002 年見解を微調整した上で、広域編年へと進もう。

栗林式土器を装飾帯構成や文様構成・器形を基準として 1～3 式の 3 型式に細分し、2 式を古・新の 2 段階に分ける。1 式と 3 式は特徴が明瞭で、特に 1 式は破片 1 点でもかなりの精度で峻別できるほどである。しかし、2 式は一括資料ごとに属性の揺れ幅が大きく、截然と分けることが難しいので古・新 2 段階区分に留めたが、馬場氏は石川の 2 式新段階を古・新に二分して、28～35 を中段階とする。

〔栗林 1 式〕壺の装飾帯構成は「2+4」（第 1 図 2）と「2+4・5」（1・5・8）が多数を占め、「2・3・4（・5）」（3）が加わる。「2+4」は沈線区画による横帯と縄文帯の重畳か、櫛描き横帯と櫛歯刺突文・短斜線文帯の重畳が目立ち、装飾帯に隙間がない。3 装飾帯の舌状懸垂文（3）は、2002 年見解



第1図 栗林式土器編年表

では懸垂文間に縄文を充填したものが主と考えたが、その後の出土資料は無文もみられる。平沢式壺の伝統を受け継いで、大形の土器では沈線文の描線が太い例が明瞭である。壺・甕とも口縁部は強く横ナデされて外反し、内外面とも無文となる。甕は胴中位に列点が巡り、その上方に条痕状の横羽状・縦走文・斜線文が施され、列点の下に及ぶ例もある。無頸壺（7・16）、蓋（6・15）、鉢（10・11）、高杯（12）の各器種が伴い、栗林式に特徴的な焼成前赤彩も定着している（10・11）。長野盆地内では、浅川扇状地遺跡群檀田遺跡の資料がもっとも内容が充実している（清水・山下 2004）。

〔栗林 2 式古段階〕 壺の装飾帯構成は、1 式で多数を占めた「2 + 4（・5）」（18～22）がなお明瞭だが、横帯の間隔が不揃いか間延びしたもの（19）や、無文帯の貫入や無文化が目立つ（20～22）。2・4 装飾帯間が無文となった例（23）も明瞭である。甕は、胴部の点列が激減し、頸部に櫛歯横線文・波状文帯をもつ例が多い。横羽状文の他に縦羽状文や、波状文と横線文の重畳する例が明瞭となる。他器種は省略。長野市本堀遺跡 16 号溝や松原遺跡 SB260・1146・SK156 などがこの段階の基準資料である。

〔栗林 2 式新段階〕 2 式では壺の無文化が進行しており、新段階では「2 + 4」や 3・4・5 装飾帯が欠落してその部位が無文となる例が多数派を占める。「2 + 4・5」（28）や「2・3・4・5」（30）は装飾だけでは 2 式古段階との識別が難しい。全面赤彩の小形壺はこの段階に明瞭である。甕は、縦羽状文が多数を占め、羽状文に隙間があく傾向がみられ、大形甕では単斜線文が多く、間隔もあく。もっとも資料が多く、一括資料に変異幅がある。松原遺跡 SB246・360・409・1102・1135 などが代表的資料である。

〔栗林 3 式〕 壺では、頸部の 2 装飾帯およびその直下に 2a 装飾帯の鋸歯文を配した例が特徴的である。36・37 の胴部には、4 装飾帯に 2a 装飾帯と同じ構図が配される。内湾口縁壺の内湾度が緩くなる（37～39）。36 の口縁端部が薄く延びる点や頸部装飾帯の横線文が短く途切れる点は、後期前葉の吉田式に引き継がれる特徴である。松原遺跡 SK191 などが代表的資料である。

以上の栗林式土器編年のうち、今回の柳沢遺跡の調査で出土した土器は 2 式古段階が多数を占める。

（2）広域編年

1980 年代まで栗林式土器は中期後半に位置付けられていた。それは、長野県域の本格的弥生文化はのちの東山道ルートで波及するという暗黙の前提があったために、伊那谷の北原式から順次北へ追跡したこと（神村ほか 1968）や、中期の土器型式編年がいまだ 2～3 段階にとどまったために、庄ノ畑式や阿島式を中期前半とすれば北原式や百瀬式・栗林式は中期後半になるからであった。また、南関東の中期後半の宮ノ台式土器との類似点から、栗林式はこれに併行するという見方もあった。

こうした編年観が修正される契機となったのは、① 1984 年に刊行された埼玉県熊谷市池上遺跡で、当時中期前半とされていた「須和田式土器」に古相の栗林式の甕が共伴し、宮ノ台式よりも遡る段階を含むことが明確になったことと、② 1984・85 年に調査された長野市浅川扇状地遺跡群牟礼バイパス D 地点出土資料が従来の栗林式に先行する一群とされ（田中 1986）、栗林式土器の上限が一段階引き上げられたこと、である。しかし、もっと直接的には、栗林式土器の成立が北陸における小松式土器の形成と分布拡大と密接に関わりと議論されるようになり、それは中期中頃に遡ると判明したことによる（安藤 1999・石川 2002）。馬場氏による詳細な検討（馬場 2008b）を参照しつつ、以下に広域編年の要点をみていこう。

〔対北陸〕 北陸方面との併行関係は、栗林 1～3 式土器が新潟県の高田平野南部と柏崎周辺でつねに小松式と共存し、特に上越市吹上遺跡（笹澤 2006）での共伴関係が重要な手がかりである。笹澤正史氏によると、吹上遺跡の中期土器群は空白期を挟むⅠ・Ⅱ期に大別でき、Ⅰ期では栗林 1 式が 2 割、小松式が 7 割を占めたのが、Ⅱ期になると栗林式が 6～7 割、小松式 3 割と主客が逆転する。このうち、Ⅰ期古

第1表 栗林式土器の編年的位置

畿 内 (佐原 1968)	河 内 (寺沢・森井 1989)	大 和 (藤田・松本 1989)	尾 張 (永井・村木 1996)	加 賀 (福海 2003)	上 越 (笹澤 2006)	北 信 (石川 2002)	上 野	北武蔵	南関東 (伊丹・大島・ 立花 2002・ 安藤 1990)				
Ⅱ 様式	Ⅱ - 1	Ⅱ - 1 b	Ⅱ - 1	八日市 3		(新諏訪町)	(中野谷原)	(横間栗 ／上敷免)	相模Ⅱ - 1				
	Ⅱ - 2	Ⅱ - 2	Ⅱ - 2	八日市 4					相模Ⅱ - 2				
	Ⅱ - 3	Ⅱ - 3	Ⅱ - 3	八日市 5					相模Ⅲ - 1				
Ⅲ 様式 (古)	Ⅲ - 1	Ⅲ - 1	Ⅲ - 1	八日市 6		(松節)	神保富士塚		相模Ⅲ - 1				
			Ⅲ - 2	八日市 7	吹上Ⅰ (古)				栗林 1	長根安坪 ／栗林 1	池上 (古)	相模Ⅲ - 2	
			Ⅲ - 3			八日市 8	吹上Ⅰ (中)	池上 (新)				相模Ⅲ - 3	
			Ⅲ - 4										Ⅲ - 5
			Ⅲ - 5	磯辺運動公園	栗林 2 (新)	栗林 2 (新)	北島	相模Ⅳ - 2					
Ⅲ 様式 (新)	Ⅳ - 1	Ⅲ - 3	Ⅳ - 1					Ⅳ 様式	Ⅳ - 3	Ⅳ	Ⅳ - 3	専光寺	吹上Ⅱ (古)
Ⅳ - 2	Ⅲ - 4	Ⅳ - 2	Ⅳ - 4	戸水 B	吹上Ⅱ (新)	栗林 3	栗林 3						
			Ⅳ - 5						SiⅤ				

*地域間の併行関係には流動的な部分を含むことに注意。

段階のSK38B・SK423には、小松式土器の最盛期である八日市地方7期土器群に栗林1式が伴う。同じくⅠ期古段階のSK187には口～頸部の器形と文様が畿内第Ⅱ様式の特徴を留め、頸部の櫛描き直線文の下端に櫛描き簾状文が一带施文される例(第2図13)があり、畿内編年に対比すると佐原真1968第Ⅲ様式古段階であろう。吹上Ⅰ期の第2図14・15も中国地方の第Ⅲ様式と酷似する。一方、吹上Ⅱ期古段階には栗林2式新段階と小松式専光寺養魚場段階、Ⅱ期新段階は栗林3式と戸水B式併行土器が伴う。

柏崎市下谷地遺跡(高橋ほか1979)では栗林1式～2式古段階がみられ、小松式土器にも時期幅がある。注目したいのは第2図16の細頸壺で、大きく開く口縁部内面に貼付突帯で片口部をつくる手法は中国地方で第Ⅰ様式末から第Ⅲ様式(佐原1968の畿内Ⅲ様式(古)併行)までみられ、凹線文が出現するⅣ様式(佐原1968畿内Ⅲ様式(新)併行)には消失する。ここでも栗林1式が畿内Ⅲ様式(古)と接点をもつことがわかる。近年では富山・石川両県の多数の遺跡で栗林式土器が確認されており、2式新段階に対比できる事例が多く、金沢市磯部運動公園遺跡では小松式磯部運動公園段階に伴う。栗林1式は鹿島町久江ツカノコシ遺跡、2式古段階は石川県羽咋市次場遺跡など少なく、久江ツカノコシ・次場両遺跡例は八日市地方8期を主とする。これらの事例は、吹上・下谷地両遺跡の状況と齟齬はないが、栗林2式新段階と小松式磯部運動公園段階が接点をもつ可能性はある。

〔対関東〕 関東方面では、栗林式土器は1式～2式古段階の実例は少ないが、2式新段階になると面的かつ多数確認できるようになる。埼玉県熊谷市池上遺跡は池上式古段階の集落であり栗林1式と接点をもつとともに、小松式八日市地方8期に対比できる土器もあり、3型式の併行関係を見出すことができる。行田市小敷田遺跡は池上式古段階も少数あるが、池上式新段階が中心をなすので、池上式新段階が一部栗林2式古段階に下る可能性がある。深谷市上敷免遺跡Y-3・4号住居と宮ヶ谷戸遺跡Y-1～3号住居跡の在来系土器は、大振りの刺突文など池上式の伝統を残しながらも北島式土器の基本形ができており、北島式古段階と呼んでよい。そして、北島式の標式遺跡である北島遺跡では、栗林2式新段階に対比できる土器が2割程度を占めており、その併行関係は動かし得ない。埼玉県北部で北島式土器の後続型式はなお不明であるが、熊谷市前中西遺跡Ⅵ(松田2011)第1号方形周溝墓では、口頸部もしくは胴上部が分かる壺9点はすべて栗林式系土器で、3式に併行するとみてよい。

南関東の諸型式との関係に目を向けると、まず池上式土器古段階の埼玉県春日部市須釜遺跡5号再葬墓で、唯一胴下部に条痕を残す南関東の中里式土器(相模Ⅲ-2)に関連する壺(鬼塚ほか2003:第31図4)

が伴っており、中里式と池上式に接点があるとみなせる。さらに神奈川県小田原市中里遺跡では、数%ながら東部瀬戸内から搬入されたⅢ - 1 期土器が中里式に伴う。こうして近畿Ⅲ - 1 / 北陸八日市地方 7 期 / 栗林 1 式 / 池上式古 / 中里式（相模Ⅲ - 2）の広域にわたる併行関係を見出すことができる。

次に、北島遺跡にわずか 6 点ながら宮ノ台式の土器片がある。そのうち擬似流水文と結紐文の各 1 点は、安藤広道氏の Si Ⅲ期（安藤 1990）に対比できる。これは、Si Ⅲ期の横浜市大塚遺跡で栗林 2 式新段階相当の土器と北島式土器が伴っていることと符合する。この宮ノ台式 Si Ⅲ期は、尾張Ⅳ-3 期土器を介して、河内編年のおおむねⅣ - 2 ～ 3 期に併行するとみられる。

以上の広域編年を第 1 表にまとめた。本来は、型式間の接点がある部分のみを結ぶべきであるが煩雑になるだけでなく、不確かな部分があるために広域編年対比表示が困難な部分が生まれる。この表はこうした不確かな部分を含むことにご留意願いたい。

2. 青銅器型式との対比

次に、銅鐸と銅戈の仔細な検討は難波洋三・吉田広両氏の本書掲載論考に譲るが、ここでは栗林式土器編年との関係をみてみよう。

銅鐸の鋳造開始時期は、かつて弥生時代前期末とされていた。しかし、難波洋三氏が最古型式の菱環鈕 1 式とした（難波 2006）名古屋市朝日遺跡出土の鋳型が尾張Ⅱ - 3 期土器と共伴したことにより、中期初めに繰り下げられた。また、福井県坂井市下屋敷遺跡の鋳型は文様が彫り込まれていないが、鋳型から復元できる銅鐸の身の正面観・側面観に反りがないから菱環鈕 2 式より下るとは考えにくい。共伴した土器は八日市地方編年で 5・6 期に対比できるので、朝日例と整合的である。菱環鈕式に後続する外縁付鈕式・扁平鈕式のうち、扁平鈕式古段階の石製鋳型が兵庫県今宿丁田遺跡でⅣ様式後半、名古屋山遺跡でⅣ様式末の土器と共伴し、扁平鈕式新段階と判断できる土製鋳型が奈良県唐古・鍵遺跡でⅣ様式末の土器と共伴する。外縁付鈕式の時期は難しいが、外縁付鈕 1 式から出現する流水文は土器では河内Ⅱ - 1 ～Ⅳ-2 に及び、菱環鈕 1・2 式が第Ⅱ様式後半であることを考え合わせると第Ⅲ様式に下げるほかない。そして銅鐸原料の鉛同位体比分析によると、菱環鈕式すべてと外縁付鈕 1 式の 8 割は朝鮮半島系鉛であったのが、外縁付鈕 1 式から中原系鉛が現れ、2 式ですべてを占める。扁平鈕式古段階をⅣ様式後半とするなら、外縁付鈕 1 式は河内Ⅲ様式、2 式はⅣ様式と接点をもつことになる。

そして兵庫県田能遺跡で中細形 a 類銅剣鋳型を出土した「鋳型ピット」に伴ったのは摂津Ⅲ - 1 様式であるから、この段階に武器形青銅器も朝鮮半島型式から派生した列島独自の型式変化が始まっている。難波氏が、和歌山県山地出土大阪湾型銅戈 a 類 6 例のうち 1 点が細形銅戈と型式学的な関係をもつと指摘した（難波 1986）ことを重視すれば、大阪湾型 a 類（吉田広氏の近畿型Ⅰ式）も上限は摂津・河内・大和Ⅲ - 1 様式と接点をもつと考えられる。銅戈そのものではないが、上越市吹上遺跡で、厳密な共伴関係ではないながら吹上Ⅰ期と思われる大阪湾型銅戈 a 類を模した土製品（第 3 図 2）も参考となる。そして大阪府東奈良遺跡で出土した大阪湾型銅戈 b 類鋳型が土製である点は、同じく土製鋳型が採用された扁平鈕式新段階と併行関係にあることを示すから畿内Ⅳ様式後半と接点をもつことになる。また、北部九州製の武器形青銅器のうち中細形 c 類銅戈は、佐賀県唐津市久里大牟田遺跡で須玖型甕棺に副葬されていた。畿内との併行関係は厳密ではないが、おおむね畿内Ⅲ様式（新）～Ⅳ様式初めと接点をもつであろう。

以上のことから柳沢遺跡と関連する青銅器型式と栗林式土器編年との関係を整理すると、外縁付鈕 1 式銅鐸は栗林 1 式、外縁付鈕 2 式銅鐸は栗林 2 式（古～新）、扁平鈕式古段階は栗林 2 式新段階から 3 式に

かけて、柳沢遺跡出土の大阪湾型銅戈 a 類は山地例よりも新相を呈することを勘案しても、吹上遺跡の土製品の時期から栗林 1 式、中細形 c 類銅戈も栗林 1 式～2 式（古～新）頃とそれぞれ接点をもつと考えられる。しかし、この併行関係はあくまで限られたデータによるものであることも忘れてはならない。

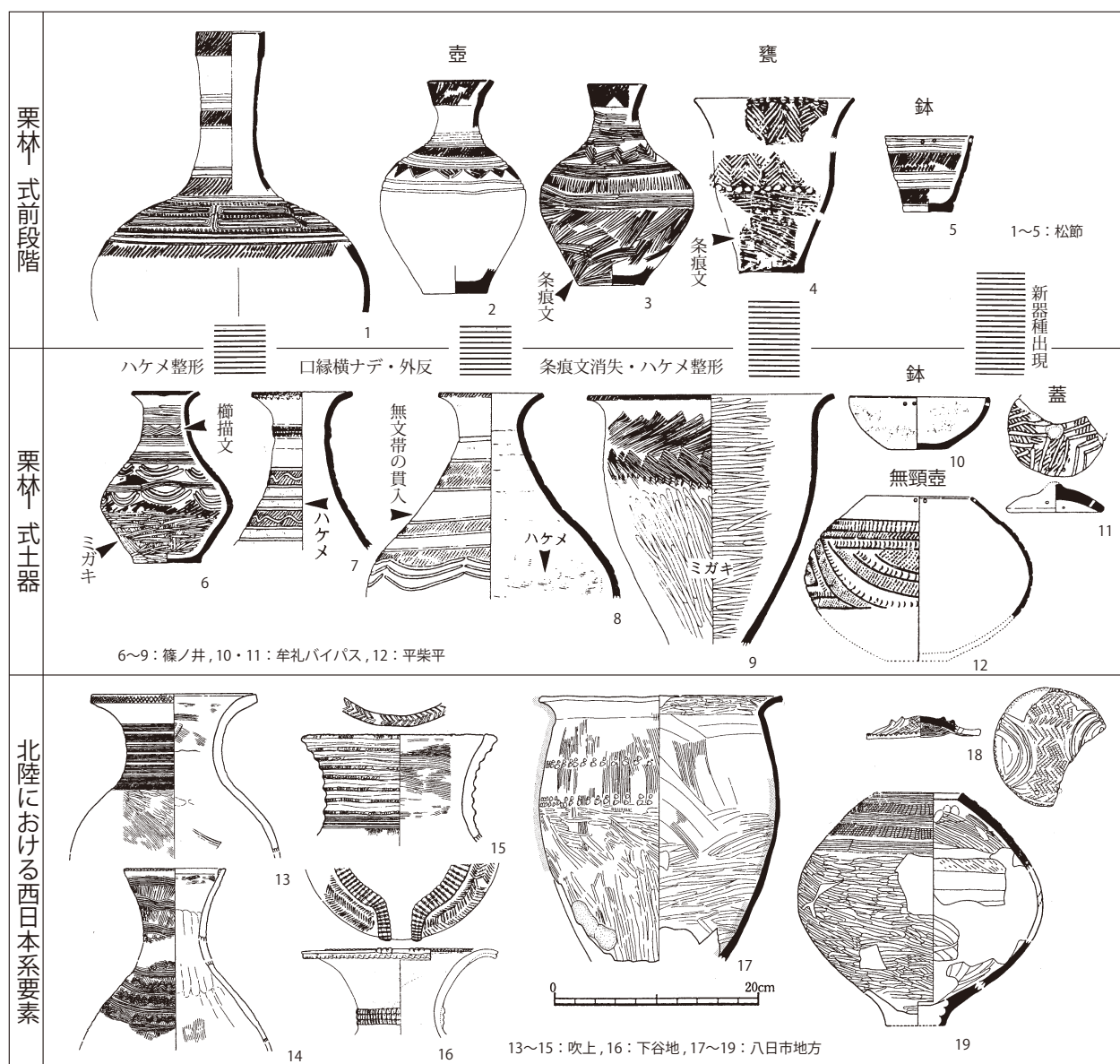
3. 栗林式土器の成立過程と青銅器受容の背景

栗林 1 式土器の成立には、在来の土器群だけでなく、北陸の小松式土器の影響を考える必要がある。

第 2 図上段に、栗林 1 式土器とその前段階の塩崎遺跡群松節地点の土器を示した。松節段階も栗林 1 式も、壺は細頸壺が顕著で、篋描き沈線で帯や構図を描いて縄文を充填し（1～3・6～8）、甕では条痕による縦・横羽状文が施される（4・9）などの点で共通しており、栗林 1 式土器に在来伝統が色濃いことが分かる。しかし、松節段階ではほとんどみられないハケメ整形が、栗林 1 式では普及している。また、壺・甕とも口縁部が強く横ナデされて大きく外反する。こうした成・整形技術の革新によって、松節段階までは壺・甕とも胴下部によく見られた条痕文（3・4）は消失し、口縁部直下が無文となる。壺口縁部への縄文施文は口唇部に限定され、甕の口唇にも縄文が施される。壺や甕の胴下部のミガキも、松節段階のミガキとは異なって、ミガキの単位が明瞭で異質である。また、栗林 1 式では無頸壺（12）と壺用蓋（11）・高杯（第 1 図 12）という新たな器種が出現する。こうした土器製作技術の激変や新器種の出現は、在来伝統の革新だけでは説明がつかない。松節段階の壺ですでに文様の横帯化が明瞭だが、栗林 1 式ではより徹底しており、横帯が重畳して隙間がない特徴は栗林 2 式古段階以後急速に緩んでいく。つまり、栗林 1 式土器は北信地域の弥生中期土器のなかでかなり特異な特徴をもつことも、他地域の影響が関与していることの傍証になる。

その「他地域の影響」とは、直接的には北陸の小松式土器八日市地方 7～8 期土器の影響である。しかし小松式土器は、畿内第 II 様式併行期に、山間部～飛騨・美濃と関係が深い大地型土器・条痕文系・岩滑式系条痕文と、丹後～中国地方に由来する櫛描文土器が折衷することによって八日市地方 6 期に定型化した土器型式である。栗林 1 式土器形成の重要属性のうち口縁部の外反とハケメ整形は、櫛描き手法で直線文と波状文を重ねる構図とともに、小松式土器に由来する。しかし、口縁部の強い横ナデは小松式土器には顕著ではない。小松式の壺・甕の口縁部は外反するが、粘土紐を積み上げる際、上方に向かうに従って外反度を増す手法であって、口縁部の強い横ナデによるものではない。したがって栗林 1 式土器の成立条件の一つである口縁部の強い横ナデは小松式ではなく、小松式土器を形成する要因となった丹後以西に由来する土器製作技術まで遡る必要がある。八日市地方遺跡で出土した甕第 2 図 17 は、口縁部を強く横ナデし、胴下半部に斜め～縦方向の入念なミガキを施している。胴上部外面には 2 条の点列が巡り、第 II 様式で施されていた櫛描文が消失した丹後以西の III 様式と酷似する。こうした土器群が、北陸で小松式土器を、さらに栗林 1 式土器を形成したのである。上越市吹上遺跡の 13～15、柏崎市下谷地遺跡の 16 は栗林 1 式段階に丹後以西の土器群が新潟県域まで浸透したことを物語る。栗林 1 式で突然出現する無頸壺や壺用蓋も、小松式八日市地方 6・7 期の 18・19 と同様に、丹後以西の土器型式なしでは理解できない。

ここでもう一点強調したいのは、こうした丹後以西に直接系譜をたどれる要素が、八日市地方 8 期以後は低調となり、中期末の戸水 B 式で再び凹線文土器が強力に浸透することである。そして、新潟県域ではさらに西方起源の要素は希薄となり、凹線文手法はまったく確認できない。すなわち、栗林式土器は成立当初は西方との関係が密であったのが、時期を下るに従ってそれが希薄になる。櫛描文土器の影響を受けて栗林 1 式で顕著になった横帯の重畳が、2 式古段階以後急速に弛緩するのもこうした背景に原因がある。



第2図 栗林1式土器の形成過程

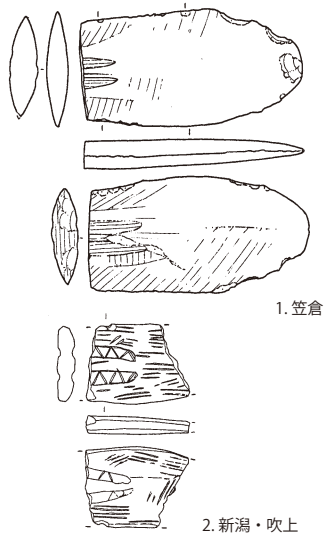
上越市吹上遺跡で出土した銅鐸形土製品、大阪湾型銅戈形土製品、石戈破片、粘板岩製銅剣形石剣の再加工品といった遠隔地系遺物がいずれも吹上Ⅰ期に属することも、こうした理解の傍証になる。

以上により、北信の北部に位置する柳沢遺跡で、外縁付鈕1式～外縁付鈕2式もしくは扁平鈕式古段階の銅鐸5点、大阪湾型銅戈a類7点、中細形c類銅戈1点がもたらされるのは、栗林1式段階が始まりで、下限は栗林2式新段階までは下らないとみるのが適正である。

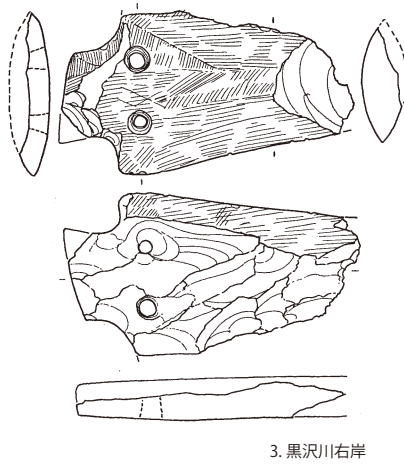
4. 栗林式土器分布圏における石戈

長野県域で石戈や有孔石剣が出土することは戦前から知られていた。柳沢遺跡から南西へ約3kmの千曲川べりにある笠倉遺跡でも石戈片（第3図1）と有孔石剣（12）が採集されている。このうち石戈は、樋の位置、樋の先端と切先の間中部で身幅が最大になること、著しく扁平で鋳をもたないこと、さらにサイズの点でも柳沢遺跡4号銅戈と酷似する。緑色岩製で、切先から8.7cmのところ折損し、折損面が研磨されて平坦になっている。上越市吹上遺跡には土製品が知られており（2）、先端が開いた樋の中に鋳

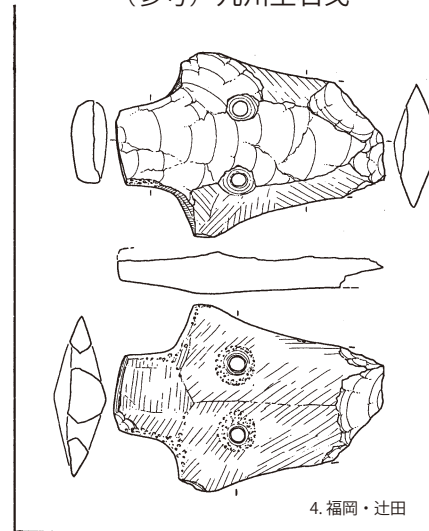
大阪湾型銅戈形石戈・土製品



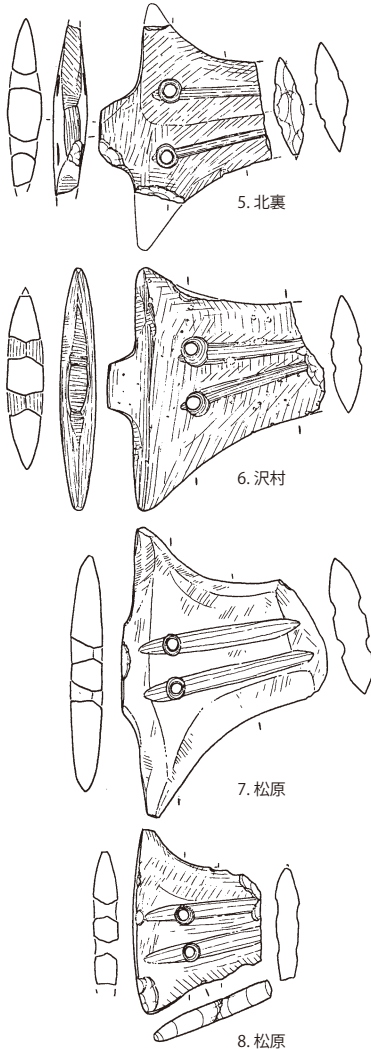
無樋石戈Ⅰ類



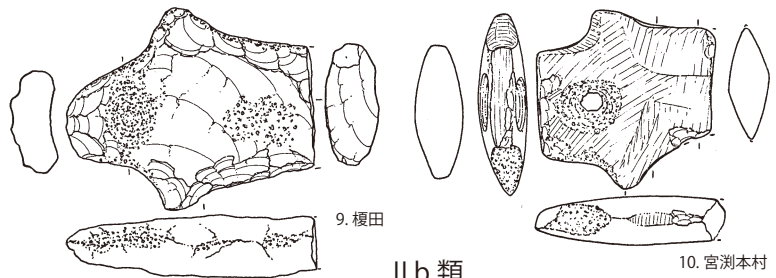
(参考) 九州型石戈



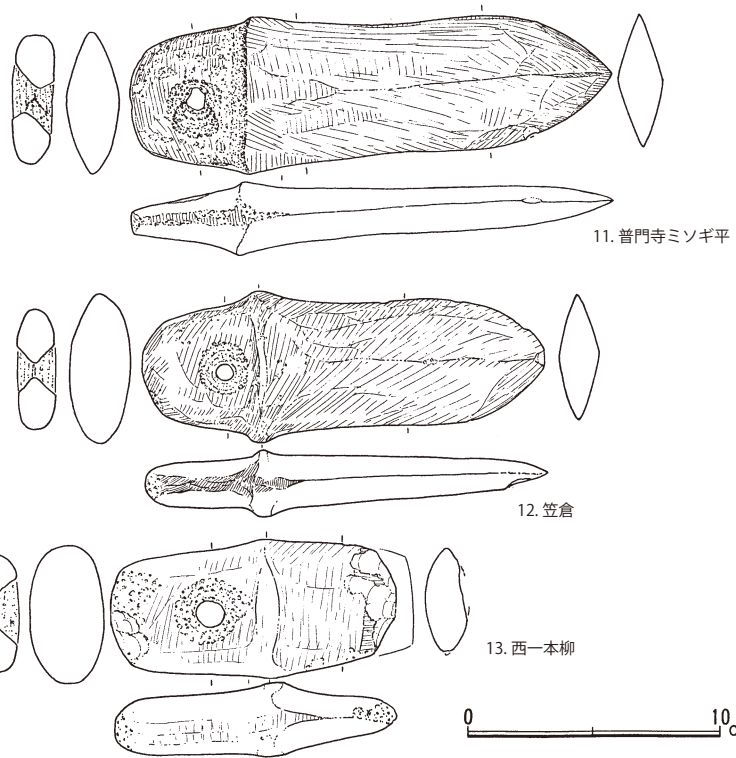
有樋石戈



無樋石戈Ⅱa類



Ⅱb類



0 10 cm

第3図 栗林式土器分布圏内の石戈

歯文が描かれている。笠倉遺跡の石戈・吹上遺跡の土製品ともに大阪湾型 a 類銅戈の模倣品である。

栗林式分布圏内出土石戈の代表例を第 2 図に図示した。身に樋をもつ有樋石戈と無樋石戈の 2 群があり、有樋石戈の樋の先端を確認できるのは笠倉例が唯一の例であるが、大阪湾型 a 類銅戈が原型と考えるべきであろう。いずれも樋の中に双孔を回転穿孔し、胡は強く張り出す。馬場氏 (2008a) は、佐久市北裏遺跡例 (5) の共伴土器が栗林 1 式～2 式古段階、松原遺跡の 7 が栗林 2 式古～中段階、8 が 2 式新段階だとして、内が順次退化すると判断する。

一方、無樋石戈は身の内寄りに双孔を穿つ (回転穿孔) I 類と、肉厚の内に一孔を敲打穿孔する II 類がある。このうち I 類は、三郷村黒沢川右岸遺跡の一例のみだが、粘板岩製で身も内も厚みがあり、内が方形を呈す。「研磨面に下端基部上の二孔からのびる鎬が稜線状にみられる」(三郷村誌 1980) ことから、4 のような九州型石戈とみなしてよい。黒沢川右岸遺跡は栗林 1 式直前が主で、栗林 1 式～2 式古段階も混じるが、栗林 1 式成立期前後に九州型石戈が松本盆地に出現していることは重要である。

次に、II 類は、幅広い身から突出する胡に向って両側縁 (刃部) が湾曲し、内が断面方形に近い II a 類と、胡が未発達で、内の平・断面形が丸みをもつ II b 類がある。形態的特徴と明瞭な鎬をもつことから明らかのように、II a 類は I 類、すなわち九州型石戈の特徴を継承しており、穿孔の方法と位置・数が変更された類型である。II b 類は、かつて有孔石剣とも呼ばれたが、両側縁の胡を結ぶ稜線が表裏で同じ向きで傾いており、石戈の形態を保持している。有樋石戈に比べて著しく肉厚で、表裏とも身に鎬が明瞭に研ぎ出されている。有樋石戈の北裏遺跡例で鎬が明瞭なのも九州型の属性かもしれない (注 2)。

このうち無樋石戈 II a 類の製作途上破損品が、磨製石斧の集中生産遺跡である長野市榎田遺跡で出土している (9)。例数が 1 点のみの無樋石戈 I 類は搬入品の可能性が高いが、有樋石戈も無樋石戈 II a・b 類も、例数がまとまり、西日本から独立した分布を呈するから千曲川流域で製作されたと考えてよい (注 3)。そして、栗林 1 式段階に近畿地方からもたらされた大阪湾型銅戈を模倣して有樋石戈を製作し、これと並行して九州型石戈の模倣が行われ、当地域内で型式変化を遂げたと考えられる。そして長野盆地で製作されたこれらの石戈は、榎田型石斧の流通網に乗って北は新潟県高田平野、南は伊那谷、東は関東各地に搬出された。しかし、その原型となった大阪湾型銅戈 a 類はそれらの地域にもたらされることはなく、銅戈と石戈という二層の西日本系祭祀は、栗林 1 式土器形成の本拠地で、かつ 1 式段階の集落が集中する長野盆地北部域にのみ定着し、それ以外の地域では石戈祭祀のみが伝えられたと考えられる。

挿図出典

第 1・2 図:各遺跡発掘調査報告書より作成。第 3 図: 2 = 笹澤 2006, 3 = 三郷村誌編纂会 1980, 7 = 飯島 1991, 9 = 広田・賛田・町田 1999 掲載図を再トレース。他は石川実測・トレース。資料調査にあたり次の方々・機関にお世話になった。梅崎恵司, 大竹憲昭, 神田弓月, 功刀司, 富山一明, 直井雅尚, 北九州市埋蔵文化財調査室, 佐久市教育委員会, 諏訪市博物館, 長野県埋蔵文化財センター, 日本民俗資料館 (敬称略・五十音順)

註

- 1 寺島氏は、その後、古段階を古・新相に二分して 5 段階に細分し、中段階、新段階古・新の 3 段階は中段階古相・新相、新段階の名称に改めた (寺島 1999)。
- 2 難波氏は、本稿の無樋石戈 II b 類の祖形を近畿地方の無樋単孔石戈とみる (難波 2011)。
- 3 これら石戈は、無樋石戈 II b 類を除くと身の中央付近で折損している。それだけでなく、その部位 (5) や側縁 (8) に両極打法による剥離面が観察されたり、折損面から連続的な打撃を加えて加工したり (13)、さらに研磨によって斧状の刃部を作り出す事例もある (7・13)。こうした人為的な折損や加撃、刃部再生はこれら石戈の機能・役割を考える上で重要な手掛かりとなるが、機会を改めて論じたい。

〔参考文献〕

- 安藤広道 1990 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分」『古代文化』42・6・7, pp.330-340・379-390
- 安藤広道 1999 「『栗林式土器』の成立をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』92, pp.1-17
- 飯島哲也 1991 「長野市松原遺跡出土の石戈について」『長野県考古学会誌』63, pp.45-54
- 石川日出志 2000 「第1節農耕文化の歩み」『長野市誌』歴史編（原始・古代・中世）, pp.110-143
- 石川日出志 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』113, pp.57-93
- 石川日出志 2002 「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100, pp.54-80
- 伊丹徹・大島慎一・立花実 2002 「相模地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』, 701-843, 木耳社
- 神村透・永峯光一・桐原健・笹澤浩・宮沢恒之・佐藤甦信 1968 「シンポジウム『弥生文化の東漸とその発展』」『長野県考古学会誌』5, pp.1-56
- 北島大輔 2005 「銅鐸はいつ作られたか」『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』, pp.106-109
- 笹澤 浩 1974 「弥生式時代」『上水内郡史 歴史篇』, pp.82-115
- 笹澤正史 2006 「土器・石器・特殊遺物等について」『吹上遺跡』pp.134-146, 上越市教育委員会
- 佐原 真 1968 「畿内」『弥生式土器集成』本編2, pp.53-72
- 清水竜太・山下大輔 2004 『浅川扇状地遺跡群 檀田遺跡（2）』長野市教育委員会
- 高橋保ほか 1979 『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡』新潟県教育委員会
- 田中寿賀子 1986 「弥生土器」『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D地点—』, pp.76-85, 長野市教育委員会
- 寺沢薫・森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』, pp.41-146, 木耳社
- 寺島孝典 1993 「弥生時代中期後半の土器様相」『松原遺跡Ⅲ』長野市教育委員会, pp.229-234
- 寺島孝典 1999 「長野盆地南部の様相」『99シンポジウム長野県の弥生土器編年 発表要旨』pp.67-75, 長野県考古学会弥生部会
- 永井宏幸・村木誠 1996 「尾張」『弥生土器の様式と編年 東海編』, pp.253-412, 木耳社
- 難波洋三 1986 「戈形祭器」『弥生文化の研究』6, pp.119-122, 雄山閣
- 難波洋三 2006 「朝日遺跡出土の銅鐸鋳型と菱環鈕式銅鐸」『埋蔵文化財調査報告書 54 朝日遺跡（第13・14・15次）』, pp.189-206, 名古屋市教育委員会
- 難波洋三 2011 「弥生の祭器—銅鐸の謎にせまる—」『平出博物館紀要』28, pp.1-21
- 馬場伸一郎 2008a 「武器形石製品と弥生中期栗林文化」『「赤い土器のクニ」の考古学』pp.111-163, 雄山閣
- 馬場伸一郎 2008b 「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第145号, pp.101-174
- 広田和穂・賛田明・町田勝則 1999 『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 福海貴子 2003 「八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡Ⅰ』pp.125-169, 小松市教育委員会
- 藤田三郎・松本洋明 1989 「大和地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』, pp.147-199, 木耳社
- 三郷村誌編纂会（編）1980 『三郷村誌Ⅰ』三郷村誌編纂会